文部省著作

高等小學讀本 一

發賣所 合名會社國定教科書共同販賣所

3759
M014
資料室

43082
教科書文庫
4
810
32-1905
200030
2302

375.9
M14

資料室

播磨尋常高等小學校

尋常科第五學年

梶本幸一

文部省著作

高等小學讀本 一

(12)

發賣所 合名會社國定教科書共同販賣所

廣島大學圖書之印
広島大学 教 22327

目録

第一課　因幡の兎……(一)……一
第二課　因幡の兎……(二)……四
第三課　春の景色……七
第四課　靖國神社……十
第五課　感心な母……(一)……十三
第六課　感心な母……(二)……十六
第七課　毒アル植物……二十
第八課　箱根山……二十五
第九課　昔の旅行……二十九
第十課　じょーじずちぶんそん……(一)……三十五
第十一課　じょーじずちぶんそん……(二)……三十八
第十二課　日本武尊の川上梟帥征伐……四十二
第十三課　足尾銅山……四十六
第十四課　地中の話……五十
第十五課　夏やすみ……五十四
第十六課　草香幡梭姫皇后……五十六
第十七課　瓜生岩……五十九
第十八課　富士登山……(一)……六十四
第十九課　富士登山……(二)……六十七
第二十課　運動……七十一

廣島大學圖書之印

勇氣

後

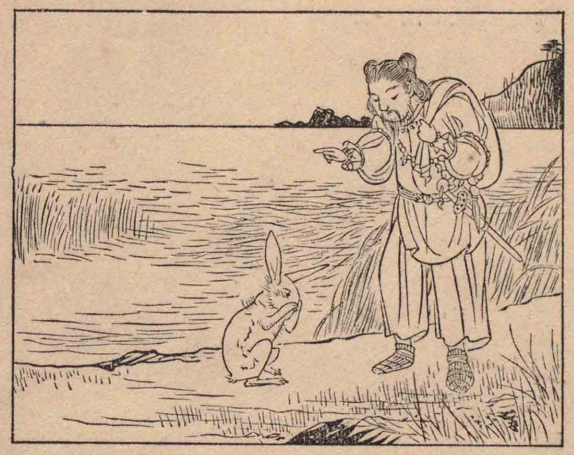
第一課　因幡の兎。(一)

天照大神の御をひに、大國主命と申す御方がございました。勇氣があって、また、あはれみぶかい御方でございました。

この大國主命が、ある日、兄様たちのおともをして、因幡の國へ、行かれました。命は重い袋をせおってをられますので、つい、道が後れて、ひとり、うみべを通って行かれますと、毛のぬけてゐる兎が、一匹、しくしくと、泣いてをります。

命は、これを見つけて、「かはいさうだ」と思って、

『おまへは、なぜ、そんなに、泣いてをるのか。』
とおたづねになりました。
すると、兎は、目をこすって、



『私は隱岐の島のうまれでございます。つねづね、『この國へ、渡って來たい。』と思ってをりましたが、よいてだてがございませんでした。
そこで、ある日、海のわにざめをだまして、『おまへと私と、どっ

笑

ちがなかまが多いか、ひとつくらべてみようではないか。』と申しますと、わにざめは、すぐに、承知して、なかまを、おほぜい、つれて來ました。
『まづ、おまへたちは、ここからむかふの岬まで、ならんでみよ。私は、その上を歩きながら、數をしらべよう。』と申しますと、わにざめは、すぐに、そのとほりに、ならびました。
そこで、私は、その上を渡って來て、いま一足で、この國に着かうとするところで、『おまへたちは、私に、うまくだまされたな。』といって、笑ってやりました。す

神

ると、いちばん、をはりに、をったわにざめが、たいそー、おこって、このとほりに、私の毛をむしり取ってしまひました。」

第二課　因幡の兎。(二)

兎は、なほ、ことばをつづけて、

「私は、しかたがありませんから、砂の上に、ねてをりますと、そこを、神様たちがお通りになって、『おい。兎。そんな所に、ねてをらずに、この、きれいな、海の水をあびて、あの、風通しのよい山の上に、ねてをれ。さうすると、すぐに、なほる。』と教へてください

吹　痛　洗

ました。

私は、『よいことを聞いた。』と思って、そのとほりにして、風に吹かれてをりますと、海の水がかわくにつれて、からだが、たいそー、痛くなってきました。それで、こんなに、泣いてをるのでございます。」

と答へました。

命は、兎様たちがそんなことをお教へなさったのだな。と思って、

「さうか。それはきのどくだ。さぞ、痛いだらう。早く、川口へ、行って、からだを洗へ。そして、がまのほを取っ

て、それをしいて、その上に、ねてをれ。さうすると、きっと、なほる。」

と、ていねいに、お教へになりました。

そこで、兎が、そのとほりに、しますと、からだが、すっかり、もとのよーになりました。

兎は、たいそー、喜んで、お礼に來て、

「おかげさまで、からだが、すっかり、なほりました。あなたは、今こそ、兄様たちのおともになってをられますが、いまに、きっと、りっぱな神様におなりになるでございませう。」

と申しました。

その後、大國主命は、わるものどもをほろぼして、兎の申したとほりに、えらい御方になられました。出雲大社といふのはこの御方をまつった御社でございます。

第三課　春の景色

散歩

ある日、私は、村はづれに、散歩に、出ました。

その日は、たいそー、天氣のよい日で、空は、青青として、すこしの雲もなく、遠い山は、霞がかかって、ほんのりと、見えてをりました。

菜

麥畑と菜の花畑とが入りまじってをるのや、みちばたの草の中に、すみれやれんげそーやたんぽぽなどがさいてをるのは、ちょーど、いちめんに、もーせんをしいたよーでございました。

小山の上や下に、櫻の花や桃の花のさいてをるのは、ちょーど、雲のおりたよーでございました。

小川の水は、さらさらと、流れてをり、岸の柳は、そよそよと、吹く風に、なびいてをりました。

柳

ひばりは、空でさへづってをり、ちょーちょは、花の上で、まってをりました。

唱歌

農夫は田をすいたり、畑をうったりして、働いてをり、子どもは摘草をしたり、唱歌を歌ったりして、遊んでをりました。

春は、たいそー、景色がよくて、時候も暑くなく、寒くなく、まことに、こころもちのよい時でございますから、人は、花見に、出たり、摘草をしたり、また、學校では、遠足などをするのでございます。

來

すみれつみつつ、　歸り行く、
春のゆふべの　村の道。
ともなひ來る　蝶、二つ、

先

あるひは、先に、　また、後に。
手に持つ花を　したひ來る
蝶の心の　愛らしさ。
いざ。來て遊べ、　もろともに。
櫻さかりの　わが庭に。

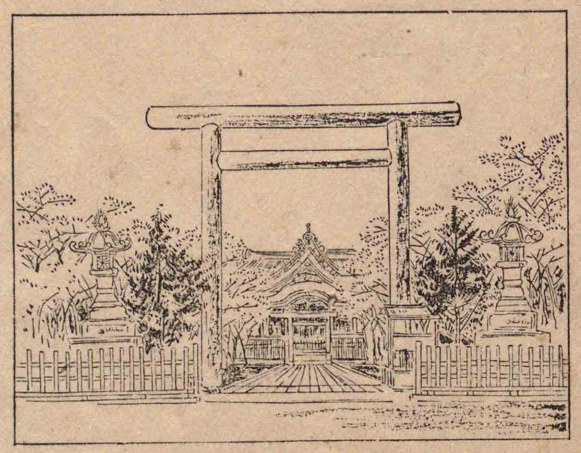
第四課　靖國神社

靖國神社ハ、東京市九段坂ノ上ニ、アリ。オモニ、明治維新後、ワガ國ノタメニ、戰死セル人人ヲマツレル社ナリ。カノ明治二十七八年戰役、明治三十三年清國事變ナドニ、戰死セル軍人モ、マタ、ココニ、マツラ

神社

レタリ。

コノ神社ハ、明治二年ニ、タテラレタルモノニシテ、ハジメハ、招魂社ト稱シタリシガ、明治十二年、別格官幣社ニ列セラレテ、アラタニ、靖國神社ノ號ヲタマハリタルナリ。ソレヨリ、毎年、五月ト十一月トニ、大祭ヲ行ヒ、ソノ大祭ニハ、ツネニ、勅使ヲタテテ、幣帛ヲタマフ。



大祭

公園

コノ神社ノ境内ハ公園ニシテ、築山、泉水ナドアリ。

マタ、梅、櫻ナド、多ク、植ヱタレバ、花時ノナガメ、コトニ、ヨシ。

鳥居ノ前ノ廣キ庭ニハ、石燈籠リョーカハニ、ナラビ、中ホドニ、大村益次郎ノ銅像アリ。大村益次郎ハ、明治維新ノコロ、兵事ニ、功勞多カリシ人ナリ。

神社ノ左ニハ、大イナル、煉瓦造ノ建物アリ。遊就館トイフ。古今ノ兵器ナドヲ陳列セル所ナリ。カノ明治二十七八年戰役、明治三十三年清國事變ナドニ、ブンドリシタル兵器ナドモ、多ク、ココニ、陳列セラレタリ。

功　器

若

第五課　感心な母。（一）

明治二十七年八月、わが軍艦高千穗は、吉野、浪速の二艦とともに、韓國の仁川といふ所の近所に、とまつて、かはるがはる、清國の軍艦の居所をさがしてゐた。けれども、清國の軍艦は、どこに、かくれたものか、かげも、形も見せん。わが軍人は、たいそーたいくつしてゐた。

ある日、軍艦高千穗の、ある大尉が藥劑室のそばを通ると、若い水兵が、女の書いたらしい手紙を膝に置いて、ひとり、めそめそと、泣いてゐた。

妻

惜

大尉は、「めめしい男だ。」と思って、

「おまへは、なぜ、泣くのだ。命がをしくなったのか。妻子がこひしくなったのか。おまへも日本男子ではないか。そんな、めめしいことで、どうなるものか。」

と、しかりつけた。

水兵は、おどろいて、立ちあがって、しばらく、大尉を見つめてゐたが、頭をさげて、

「それは、あんまりなおことばです。私は、妻もありません。子もありません。私も日本男子です。なんで、命を惜みませう。どうぞ、この手紙を見てください。」

といって、その手紙をさし出した。大尉はそれを、取って、見た。その手紙は字もまづく、文も、ところどころ、わかりかねる所があったが、だいたい、次のよーな事が書いてあった。

『聞けば、おまへは、豐島の戰にも、出ず、また、威海衛の港口を撃ったときにも、べつだん、てがらをたてなかったさうな。『さて、さて、ふがひないことだ。』と、母は、残念に、思ってゐます。おまへは、何のために、戰爭に、出たのですか。命をすてて、天皇陛下に、つくす

ためではありませんか。

村の人たちは、朝晩、たづねてくださって、『たった、ひとりのむすこさんが、戰爭に、出られて、さぞ、こころぼそいでせう。おるすの間、不自由なことは、なんでも、えんりょなく、おっしゃるがよい。』と、しんせつに、いってくださいます。母は、その人たちを見るたびに、おまへのふがひないことを思ひ出して、胸もはりさけるよーです。おまへも、ちっとは、母の心をさっしてくれるがよい。」

第六課　感心な母。（二）

涙

大尉は、これを讀んで、思はず、涙をおとした。しばらくして、水兵の手を取り、せなかをなでて、

「あー。ゆるせ。わたしがわるかった。おまへはよい母をもってゐる。たぶん、おまへは、よい家柄に、生れたものだらうな。」

といった。

水兵は、頭をふって、

「いえ。私は鹿兒島のうみばたのりょーしの子です。父は、早く、死んで、うちには、母ばかり、のこってゐますが、その母から、『ふがひない。』とまで、いはれるか

理

卒

と思ふと、ぐやしくてたまりません。」

といった。

大尉は、それをなぐさめて、

「おまへのくやしがるのも無理はない。しかし、今の戰爭は、昔の戰爭とはちがって、ひとりで、進んで、てがらをたてるよーなことはできない。ぜひ、士官と兵卒とひとつになって、働かなければならない。それだから、兵卒は兵卒のよーに、上官の命令を守って、じぶんの職務に、せいだすのがなによりだ。おまへの母は『命をすてて、天皇陛下に、つくせ。

愉快

といってゐるけれども、まだ、そのをりにあはないのだから、しかたがないではないか。あの豐島の戰にであはなかったことは、誰も遺憾に思ってゐる。しかし、これも、しかたがない。

そのうちには、愉快な戰爭もあるだらう。その時には、おたがひに、いっしょーけんめいに、働いて、わが高千穗の名をあらはさう。このわけを、よく、母にいってやって、安心させるがよい。」

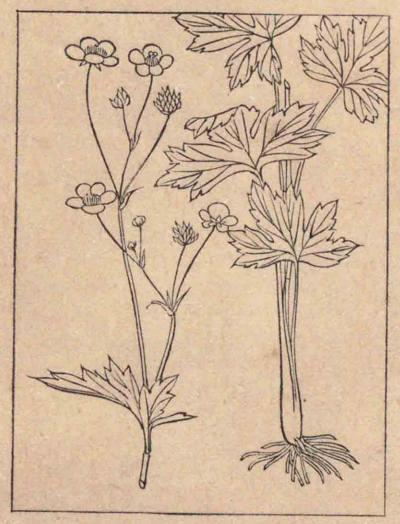
といって聞かせた。

水兵は、頭をさげて、聞いてゐたが、やがて、敬礼をし

て、にっこりと、笑ってたち去った。

第七課　毒（ドク）アル植物。

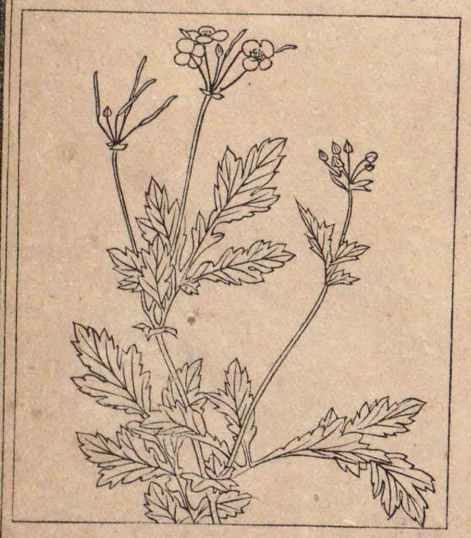
アル日、小太郎ガ、父ニツレラレテ、野原ヲ散歩シタル ニ、ミチバタ ニ、次ノ畫（エ）ノゴトキ植物ノ花サキヰタリ。ソノ花ハ、金色ニシテ、ハナハダ、美麗（ビレイ）ナリケレバ、小太郎ハ、カケヨリテ、コレヲ折リ取ラントセリ。父ハ、アワタダシク、ソレヲトドメテ、



「アー。小太郎ヨ。ソレハキンポーゲトイヒテ、ハナハダ、毒アル草ナリ。折リ取ルコトナカレ。」トイヒタリ。小太郎ハ、オドロキテ、タダチニ、折リ取ルコトヲヤメタリ。

父ハ、マタ、ムカフニ、次ノ畫（エ）ノゴトキ植物ノアルヲユビザシテ、

「見ヨ。ムカフニモ、黃（キ）色ノ花ノサケル草アリ。アレハクサノオートイフモノナリ。アノ草ノ莖（クキ）、マタ



黄

注意

種

ハ、葉ニ、傷ツクレバ、赤黒キ色ノ汁流レ出ヅベシ。アレモ、マタ、ハナハダ、毒アルモノナレバ、ケッシテ、折リ取ルコトナカレ。

スベテ、草ノ茎、マタハ、葉ナドニ、傷ツケテ、黄色、赤黒キ色、マタハ、白キ色ノ汁流レ出ヅルモノ、マタハ、茎、葉ナドノ臭キモノノ中ニハ、毒アルモノ多シ。注意セザルベカラズ。」

トイヒ聞カセタリ。

カクテ、シバラク、行キテ、二人ハ、アルタンポミチニ、出デタリ。ミチバタノ溝ニハ、次ノ畫ノゴトキ、二種

ノ、植物ノ花、マタ、サキヰタリ。

小太郎ハ、メバヤク、ソレヲ見ツケテ、

「父ヨ。コレラノ草モキンポーゲノ類ナリヤ。」

ト問ヒタリ。

父ハ、

「シカリ。キンポーゲノ類ニシテ、キツネノボタントイフモノト、タガラシトイフモノトノ二種ナ

藥

リ。イヅレモ、マタ、毒アル草ナリ。

サテ、ケフハ、フシギニモ、毒アルモノノミ、目ニアタリタリ。サレド、見ヨ。ムカフノ沼ニハ、アヤメノ花サケリ。折リ取リテ、與フベシ。母上ヘノ土產ニセヨ』。

トイヒテ、ソレヲ、折リ取リテ、與ヘタレバ、小太郎ハ大イニ、喜ビタリ。

カクテ、二人ハ、家ヘ、歸リシガ、歸ルミチニテ、父ハ、小太郎ニ、多クノ毒アル植物ノ中ニハ、藥トシテ、ソレゾレ、ツカヒミチノアルモノモアルコトナド話シ

温泉

清

聞カセタリ。

第八課　箱根山。

箱根山トハ相模ノ國ノ西部、富士山ノ東南ニアル、一ムレノ山ヲイフ。ソノウチニ、神山、駒岳、二子山ナドアリ。イヅレモ、昔ハ、噴火シタリシモノナリトイフ。今モ、神山ノ山腹ニハ、大涌谷、マタハ、大地獄トイヒテ、硫黄ノ煙ヲハキ出セル所アリ。

箱根山中ニハ、温泉多シ。ソノウチ、湯本、塔澤、宮下、堂島、底倉、木賀、蘆湯ナドハ、昔ヨリ、世ニ、知ラレタリ。アタリ、シヅカニシテ、空氣清ク、景色、マタ、ヨケレバ、浴

山

客年中、タエズ。夏ハ、コトニ、多シ。

山上ニハ、蘆湖アリ。太古ハ、噴火口ナリキトイフ。マ・ハリノ山山、コトゴトク、ソノカゲヲウツシ、富士山、マタ、ソノカゲヲウツスコトアリテ、景色、ハナハダ、ヨシ。

湖

湖ノ北ヨリ、流レ出ヅル川ヲ早川トイフ。前ニ、ノベタル温泉ハ、タイテイ、ソノ兩岸ニ、アリ。湖ノ中ニ、半島アリ。塔島トイフ。イマ、離宮ノアル所ナリ。離宮ノ西方ニハ、關所ノアトアリ。徳川時代ニ、役人ノ旅人ヲアラタメタル所ナリ。

道

困難

當

箱根山ハ、上下、オヨソ、八里アリテ、道、ハナハダ、ケハシケレド、昔、東海道ヲ往來スルニハ、カナラズ、コエザルベカラザル要路ナリキ。サレバ、旅人ハ、ココヲコユルニ、大イニ、困難セシガ、明治二十二年、東海道鐵道ノ通ジテヨリ、コレヲ上下スル必要ナク、車中ニ、安坐シナガラ、タチマチ、スギ去ルコトヲウルニイタレリ。

當地に、まゐり候てより病氣も、しだいに、かるくなり、食も、よほど、すすみ候。このよーすにては、いま一週間も、

留守

たち候はば、全快すべしと存候。御安心なされ度候。私留守中は、日日、學校へ、かよひ、うちに、居るときには、おぢい様やおばあ様、母上などの仰を守るよー、こころがけられ度候。いづれ、全快の上、歸宅し、いろいろ、當地のめづらしきことなども話すべく候。

父より

歸宅

六月二日

松吉どの

父上様には、だんだん、御病氣も、おな

ほりなされて、近いうちに、お歸りなされるとのこと。みんな、たいそー、喜んでをります。仰のことは、日日、よく、こころがけてをります。どうぞ、御安心下さいませ。一日も、早く、御歸りなされて、いろいろ、めづらしいお話をしてくださるのを待ってをります。

松吉

六月五日

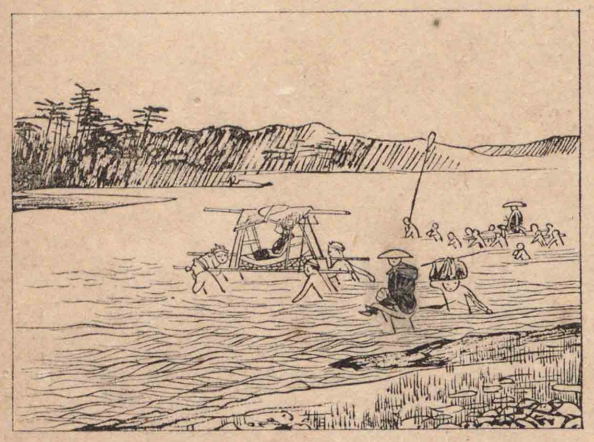
父上様

第九課　昔の旅行。

松吉の父は、しばらく、箱根温泉に、とーじに、行ってゐたが、ほどなく病氣がなほって、歸って來た。ある夜、箱根山の有樣を話したあとで、昔の人が東海道を旅行したときの有樣をも話した。

徳川時代に、東海道といったのは、京都から、近江、伊勢などといふ國を通って、江戸に、行くまでの間のかいどーのことで、その間が、およそ、百三十里ばかり、あった。そして、その間には、五十三次といって、宿屋などのある、おもな驛が、五十三ほど、あった。京都の方から江戸の方へ、旅行したり、江戸の方から

越



京都の方へ、旅行したりする人は、みんな、その驛に、休んだり、とまったりして、十日あまりもかかって、やうやう、江戸なり、京都なりに着くことができるのであった。

そして、その旅行する間にも、いろいろ、難儀なことがあった。あの、上下八里もある箱根山も越えなければならず、また、天龍川、大井川、富士川、六郷川などといふ川も、そのころは、

肩

まだ、橋がかけてなかったので、人の肩車に乗ったり、れんだいや舟に乗ったりして、渡らなければならなかった。

また、あの箱根などには、關所があって、役人が、いちいち、旅行する人をあらためてゐた。そして、もし、その關所をよけて、わき道を通るよーなものがあると、關所破といって、はりつけにするのであった。

しかし、こんな時代にも、かごといふものがあって、足の弱いものなどは、それに乗りもしたが、まだ、警察署などといふものもなかった時のことだから、かごかきが、途中で、かごをとめて、客に錢をねだるよーなことも、たびたび、あった。また、おひはぎやごまのはひなども、おほぜい、をって、人をおどしたり、だましたりして、錢や荷物をとるよーなこともたびたび、あった。

それで、旅行する人の中には、うちを出る時に、『まったと、顔を見ることができないかも知れない。』といって、うちじゅーのものと、みづさかづきをするものもあったといふことだ。

ところが、今はどうだ。道は平になり、橋はかかり、

途中

顔

馬車
人力車

關所（せきしょ）などであらためられることもなければ、おひはぎやごまのはひなどにあふこともない。それに、鐵道が通じてゐるから、わづか、十三四時間もかかれば、京都から東京へなり、東京から京都へなり、行くことができる。

いや。東海道ばかりではない。たいていの所には、鐵道が通じてをる。通じてをらない所にでも、馬車や人力車があるから、わづかな錢、わづかな日數で、やすやすと、旅行することができる。おまへたちは、ほんとーに、よい時代に生れたものだ。

工夫

第十課　じょーじ、すちぶんそん。（一）

日本に、鐵道の通じたのは、明治五年に、東京市と横濱（よこはま）市との間に、通じたのが、いちばん、はじめである。それから、おひおひ、諸方に、通じて、今では、遠方へ、行くにも、汽車に乗れば、はやくて、便利で、昔の、おそくて、不便であったことなどは、汽車の中の笑話になってゐる。

さて、かういふ、便利な鐵道をはじめて、工夫したのは、じょーじ、すちぶんそんといふ人である。この人は、いぎりすの人で、今から、百二十年ほど前に、生れた

勉強

人である。

すちぶんそんの父は、ある石炭坑の火夫であって、ごく、わづかな給金をもらって、やうやう、うちじゅーのものを養ってゐた。かういふ有様であったので、すちぶんそんは、學校にはいって、勉強することができなかった。しかし、からだもじょーぶで、きしょーも強い人であったから、つらいことや、難儀なことに、よわるようなことはなかった。

夜時計

すちぶんそんは、九歳のころから、ある牧場の番人に、やとはれて、賃錢をもらってゐたが、その後、父のやとはれてゐる石炭坑にやとはれた。そして、晝は、じぶんの、受持の仕事に、せいを出し、夜は、夜學校に行って、讀書などを學んでゐたが、だんだん、ひきあげられて、とーとー、そこの機關掛にまでなった。

すちぶんそんは、子どものときから、たいそー、きょーで、物のしかけなどをしらべることがすきであった。それで、時計などは、いちいち、機械をとりはづして、しかけをしらべたり、また、もとのとほりに、組み

立てたりしてゐた。それだから、となりのうちなどで、時計がくるふと、すぐに、すちぶんそんのところに、持って行って、なほしてもらってゐた。

すちぶんそんは、石炭坑にやとはれた後、蒸氣ぽんぷを扱ってゐたことともあったが、そのときにも、前に、時計のしかけをしらべたよーに、その蒸氣ぽんぷのしかけをしらべた。それで、その機械がそんじて、そこらに、居る人では、なほすことのできんのでも、すちぶんそんに見せると、すぐ、なほすことができた。

第十一課　じょーじ、すちぶんそん。(二)

幾

前に、いったよーに、すちぶんそんは、ほかの人には、できんことでも、じぶんには、できるところから、「これまで、ひとが、工夫してみて、できなんだものを、じぶんで、工夫してみよう」と思った。それは、蒸氣機關で、荷物をはやく、運ぶことのできる機械のことであった。この機械は、これまで、工夫してみたものが、幾人も、あったが、誰にも、できなんだのである。やうやう、工夫して、作ってみても、動かすと、こはれたり、また、すこしも、動かなんだりしたのである。ただ、すこし、みこみのあったのは、歯車を、歯のついてゐるれーるの上で、

走

走らせる工夫であった。しかし、これも、たいそー、速度がおそいので、あまり、やくにたたなんだのである。そこで、すちぶんそんは、はじめて、すべりのよい車を、すべりのよいれーるの上で、走らせる工夫をした。

その工夫は、みごとに、できあがった。

その後、いぎりすの、ある地方で荷物を運ぶために、すちぶんそんの工夫した鐵道をしかうといふことになって、すちぶんそんは、高い給金で、その機關師に、やとはれた。

見

いよいよ、その鐵道の通じたときには、人が、おほぜい、見物に、出た。中には、かちで、競走しようと待ちかまへてゐるものもあり、また、馬に乗って、競走しようと、待ちかまへてゐるものもあった。

やがて、すちぶんそんは機關車を運轉しはじめた。かちの人も、馬に乗ってゐる人も競走しはじめた。ところが、すちぶんそんが、一時間十五まいるの速度で、走らせたから、かちの人も、馬に乗ってゐる人も、すぐ、あとになってしまった。見物に、出た人は、その速度のはやいのと、勢のすさまじいのとに、おどろかんも

各

のはなかった。

これから、だんだん、いぎりすの各地方をはじめとして、他の國國でも、旅客や荷物などを運ぶために、鐵道をしくよーになった。

かういふ、便利な鐵道を工夫した、すちぶんそんのてがらは、まことに、たいしたものではないか。

勇壯

第十二課　日本武尊の川上梟帥征伐

日本武尊は景行天皇の皇子にして、うまれつき、勇壯におはしけり。このころ、くまそのかしら、川上梟帥といふもの、天皇の仰に從ひたてまつらずして、

重

衣服

はなはだ、ぶれいなりければ、天皇、尊をして、これをうたしめたまへり。

尊、梟帥の家に、いたりて、見たまふに、兵卒ども、家のまはりを、三重に、とりかこみ、はなはだ、堅固に、守りゐたり。尊は、「いかにすべきか。」と、あんじたまひしが、そのとき、梟帥は、あらたに、別室をつくり、その祝せんとて、親類など、多く、集めて、さかもりせり。尊、すなはち、かみをときて、うしろに、たれ、女の衣服を着、短刀を、ふところに、かくし、多くの女に、まじりて、梟帥の室に入りたまへり。梟帥は、男なりとは、すこしも、

知らず、しきりに、さかづきをさして、尊に酒を飲ませなどしけり。

夜は、やうやく、ふけたり。人は、わが家に、歸りたり。梟帥は、ゑひて、たふれたり。

尊は、これを見て、大いに、喜び、ただちに、ふところの短刀を出して、その胸をさしたまへり。つねの人ならば、ただ、「あ。」と、さけびて、息たゆべし。されど、梟帥はごーのものなり。大聲に、尊を呼びて、「しばらく、待ちたまへ。君は何人にておはするぞ。」といへり。

尊は、さす手をゆるめて、「われは今の天皇の皇子、や

まとをぐなといふものなり。なんぢ、わが天皇に從ひまつらずして、はなはだ、無礼なれば、天皇われをしてうたしめたまふなり。」とのたまへり。尊は、これまで、やまとをぐなとなのりたまひたりしなり。

梟帥は、これを聞きて、大いに恐れ、ことばを改めて、「筑紫には、われより、強きものはなし。されば、みづから、梟帥と稱したり。しかるに、やまとの國には、われより、強き人もおはしけり。われ、君に、御名を奉らん。今より後は、やまとたけるのみことと申したてまつるべし。」といひて、息たえたり。これより、人、みな、日

無礼

奉

本武尊と申したてまつれり。

第十三課　足尾銅山

足尾銅山ハ、日光ノ西南ニ、アリ。今ヨリ、二百九十餘年前ニ、コノ地ノ農夫ノ、ハジメテ、發見シタルモノナリトイフ。

銅

コノ銅山ハ、ソノコロヨリ、銅ヲ産スルコト多クシテ、江戸城、東照宮ナドニ、用ヒタル銅ハ、タイテイ、コノ銅山ヨリ、産シタルモノナリトイフ。サレド、ソノコロニハ、銅ヲホリ取ル方法、コレヲフキワクル機械ナド、ナホ、ジューブンナラザリシカバ、人手ノミ、多

方法

西洋

ク、カカリテ、ソノ産スルタカハ、ワリアヒニ、スクナカリキ。

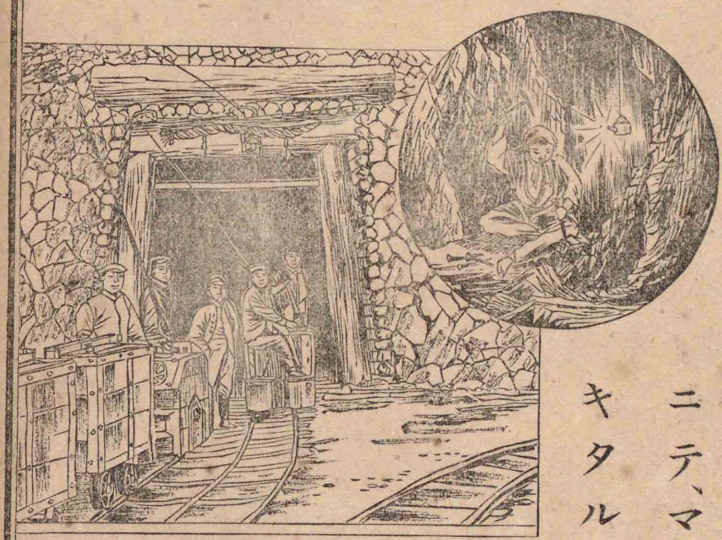
シカルニ、オヨソ、二十年前ヨリ、西洋諸國ニ用ヒラルル種種ノ、便利ナル方法、機械ナドヲ用フルコトトナリタレバ、人手ノカカルコトハ、ニハカニ、スクナクナリ、産スルタカハ、非常ニ、多クナリテ、世界屈指ノ大銅山トナルニイタレリ。

コノ銅山ニハ、數箇ノ坑道アリ。ソノ中ニモ、マタ、タテニ、ヨコニ、多クノ坑道アリ。三千人バカリノ坑夫ハ、ソノ中ニ入リテ、カンテラヲツルシ、金槌トタガ

掘

ネトヲ持チテ、銅鑛ヲ掘リ取ル。

コノ掘リ取リタル銅鑛ハ、アルヒハ、電氣ノシカケニテ、マキ上ゲ、アルヒハ、坑内ニシキタルレールニテ、坑外ニ、運ビテ、コレヲ選鑛場トイフ所ニ送ル。選鑛場ニハ、種種ノオホジカケノ機械アリ、マタ、多クノ女工アリテ、イチイチ、ソノヨキモノト、アシキモノトヲエ



人口

リワク。

カク、エリワケタルモノハ、マタ、コレヲ製煉場トイフ所ニ送ル。製煉場ニハ、コトニ、オホジカケノ機械アリテ、焼キ、カツ、トカシテ、銅鑛ヨリ、銅ヲフキワク。カクテ、マザリモノナキ銅ハ、ハジメテ、製セラルルナリ。

コノ銅山ノカタハラニ、足尾町アリ。足尾町ハ、モト、山間ノ、サビシキ村ナリシガ、カク、鑛業ノ盛ニナリシタメニ、今ハ、人口、オヨソ、三萬ニ達シ、學校、病院、ソノホカ、都會ニアルモノハ、ホトンド、ソナハラザル

コトナキニイタレリ。銅山ノ盛ナルコト、コレニテモ、オシハカルベシ。

第十四課　地中の話。

ある日、教師は、一人の生徒と、地中のことにつきて、次のごとき問答をなしたり。

教師「なんぢは、われらが、つねに、ふめる土地の中より、いかなる大切なるものを産するかを知れるか。」

生徒「われは、すでに、石炭、石油などの、土地の中より、産するものなることを學びたり。また、かつて、種

答

種の金屬、飾石、寶石なども産するものなることを聞きたることあり。」

教師「種種の金屬とはいかなるものをさすか。」

生徒「金、銀、銅、鐵、鉛、錫などなり。」

教師「しからば、飾石とは。」

生徒「水晶、めのーなどなり。」

教師「しかり。よく、答へたり。しからば、寶石とは。」

生徒「知らず。」

教師「寶石とは金剛石、るびー、さふぁいやなどなり。そのうち、金剛石は萬物中、もっとも、堅きものにして、

屬

堅

有

よく、すきとほり、はなはだ、強きつやを有し、そのうへ、産することも、はなはだ、まれなれば、寶石中、もっとも、貴きものといはるるなり。」

生徒「金剛石は、日本には、産せずや。」

教師「しかり。日本には、いまだ、見出されず。あふりかの南部、南あめりかの東部、あじやの南部などに、産す。」

井

生徒「師よ。われらの、つねに、飲める井の水は、土地の中より、産するものといひえずや。」

教師「井の水、泉、温泉など、みな、土地の中より、産する

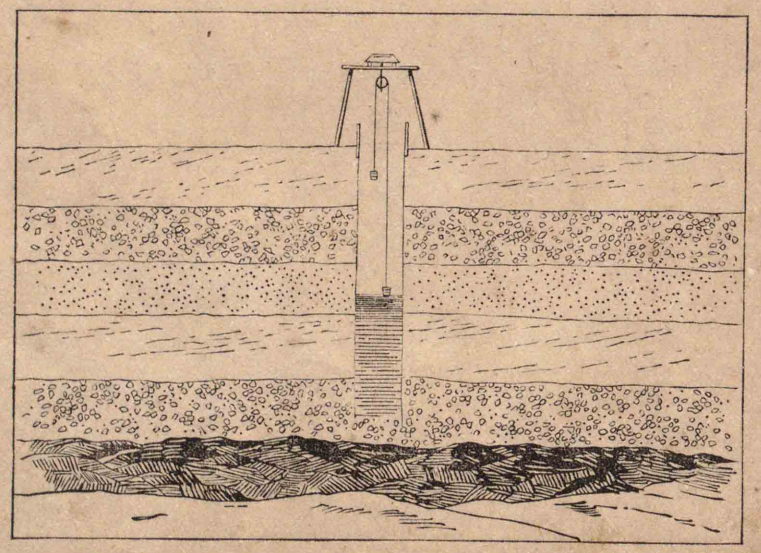
泉

岩

ものといひうべし。」

生徒「それらは、いかにして、土地の中に、存するか。」

教師「雨水などの、土地の中にしみこみて、ねばつち、または、堅き岩の上にたまれるが井の水にして、かくしみこみて、たまれる水の、ふたたび、しぜんに、じめんに、出づるが泉なり。また、温泉は、深く、土



内

地の中にしみこみたる水の、地熱といふ、地球の内部にある熱にあたためられて、ふたたび、じめんに、出づるものなり。」

生徒「温泉は、何ゆゑに、諸種の病に、こーのーあるか。」

教師「地中にあるとき、まはりにある、種種の、藥となるものをよーかいせるがゆゑなり。」

第十五課　夏やすみ。

ことしの夏の休には、
山に、遊びて、歸り來ん。
松の木蔭に、休みては、

浴　貝

瀧見ることも樂よ。」
ことしの夏の休には、
海水浴もこころみん。
よせては、雪とちる波を、
ただ、あけくれの友として。」
からだきたふは山の道、
空氣のよきは海のそば。
花つみ集め、貝を取り、
知識ひろむる益多し。」
いざ。いざ。行かん、この夏も。

父もろともに、母ともに。

かはれる里のならはしを

見聞くもうれし、旅をして。」

第十六課　草香幡梭姫皇后。

草香幡梭姫皇后は雄略天皇の皇后でございます。」

ある日、天皇とごいっしょに、葛城山に、かりに、お出でになりました。そのとき、大きな猪が、にはかに、草の中から、あれて出ましたから、かりうどなどは、たいそう、恐れて、みんな、木に、上ってしまひました。

そこで、天皇は、おそばのものにむかって、「あれをさし

逃　弓

とめよ。どんなに、あらいけものでも、人にあへば、たちとまるものだ。」と仰せになりました。おそばのものも、おくびょーものでございましたから、また、木に、逃げ上ってしまひました。

猪は、いよいよ、あれまはって、天皇をめがけて來て、つきかからうとしました。天皇は、弓で、その猪をおさへて、一息に、ふみころしておしまひになりました。」

さて、天皇は、おそばのものが、いくじなく、逃げたので、たいそー、御きげんがわるくて、そのものを呼び出して、きってしまはうとなさいました。

皇后は、たいそー、きのどくに、お思ひになって、『國のものは、みんな、陛下は、かりのよーな、あらいことばかり、おすきでいらっしゃる。』と申してをります。それに、いま、この猪のために、おそばのものをおきりなさったなら、國のものは、なんと申しませう。どうぞ、許してやってくださいませ。』とおいさめになりました。

天皇は、いったい、どりょーの大きな御方でございましたから、すぐ、お許しになりました。そして、皇后とひとつ車に乘って、お歸りになる途中で、「あー。かりに、出るものは、鳥やけものばかりをえものにして、歸る

裁縫

夫

下

が、われは、けふは、よいことばまでもえものにした。』と仰せになって、たいそー、御きげんよく、お歸りになりました。

第十七課　瓜生岩

瓜生岩は福島縣の人なり。若きとき、會津の醫師、それがしにつきて、讀書、裁縫、作法などを學び、かたはら、育兒の法を習ひたり。

かくて、十七歳のとき、會津藩士、瓜生氏に嫁ぎたりしが、よく、夫としうと、しうとめとにつかへ、下男、下女をいたはり、もっぱら、家事をはげみたりしかば、家

決心

父母

のもの、みな、むつみあひて、樂しく、くらしたりき。しかるに、三十四歳のとき、その夫、ふと、重き病にかかりて、つひに、この世を去りたり。岩の悲はいかばかりなりしならん。されど、岩は、なみなみの女に、あらざりければ、いたづらに、なげくことなく、「女ながらも、國のため、君のために、つくさん。」と決心せり。岩は慈愛の心、きはめて、深く、つねに、思へるよー、「世にあはれなるもの多けれども、をさなきときに、父母をうしなつるもの、貧しき家に生れて、衣食に、困れるものほど、あはれなるはなし。」と思ひたり。すな

數

はち、近き村村の、かかる兒童を集めて、これを養ひ、衣食を與ふることより、學問、てわざを教ふることにいたるまで、心を用ふることわが子にことなることなかりき。かく、すること十數年にして、そのめぐみを受けて、みづから、せいかつするにいたれるもの百人以上におよべりといふ。

岩は、その後、今の福島町に、養育會をまうけ、ますます、はげみて、多くの兒童を養育したり。かくて、その慈善の行、しだいに、世に、聞えければ、明治二十四年、東京養育院は、皇后陛下の御内意を受けて、岩をま

生

ねきたり。岩は、そのありがたさに、感じて、ただちに、東京養育院に入りて、その世話掛長となりたり。かくて、三年の間、ねっしんに、その職をつとめたりしが、ゆゑありて、生國に歸りたり。

岩の歸りたるよくねんかの明治二十七八年戰役はおこりたり。岩は「女の身にかなふだけの忠義はつくさん。」と思ひて、種種、かんがへねたりしが、わが軍人の、遼東半島の雪に、なやめるよしを聞きて、一種の雪ぐつを工夫したり。かくて、諸方をめぐりて、その費用をつのり、數萬の雪ぐつを作りて、これを、

貴婦人

下

深

恤兵部に、けんじたり。

このころ、皇后陛下は、多くの貴婦人たちと、ほーたいを作りたまひて、これを戰時病院に送りたまひしが、あまたのくづを生じたれば、これを岩に下したまひたり。岩は、大いに、そのありがたさに、感じて、このくづを織りて、小さきはたを作り、皇后陛下の御歌を深め出して、戰死せるものの家族などに、おくりたり。

岩の善行、かくのごとく、多かりしかば、明治二十九年、藍綬褒章をさづけたまひたり。

消

岩は、明治三十二年、六十九歳にて、この世を去りしが、岩の行をしたへるもの、あひ、はかりて、その銅像を、淺草公園にたてたり。

第十八課　富士登山。(一)

富士山ニノボルハ夏ノ盛ヲヨシトス。コノコロハ、山上ノ雪、タイテイ、消エ、寒サモ、サホド、キビシカラネバナリ。

登山スルニ、五ツノ道アリ。イヅレモ、チョージョーマデノ間ヲ、十段ニ、分チテ、コレヲ一合目、二合目ナドト呼ベリ。一合目ゴトニ、小屋アリ。登山スル人ノ休憩

角

スル所ナリ。

登山スルニハ、マヅ、フモトニテ、ワラヂ五六足ト綿入トベントートヲ用意シ、コレヲゴーリキトイフ人夫ニセオハセ、オノレハ、金剛杖ヲツキテ、ミガルニ、出デ立ツベシ。金剛杖トハ白木ヲ、八角ニ、ケヅリタル杖ニシテ、登山スルモノノ、カナラズ、タヅサフルナラハシトナレルモノナリ。

カクテ、ゴーリキニ案内セラレテ、ノボリ行ケバ、ハジメノウチハ、道、ヤヤ、平カニ、木カゲモ多クシテ、サマデ、困難ナラザレドモ、ヤウヤク、ノボルニシタガ

積

呼吸

ヒテ、道ハケハシク、草木ハ小サク、ツヒニハ、マッタク、草木ナキ岩山トナリテ、歩行、ハナハダ、困難ナリ。

コノアタリハ、風ハゲシケレバ、小屋ハ、ミナ、石ヲ積ミカサネテ、ツクレリ。登山スルモノハ、多ク、ココニタチヨリテ、水ヲモトム。ソノ水ハ、小屋ノ主人ガ、遠キ谷間ヨリ、取リ來リタル雪ヲトカシタルモノナリ。

カクテ、ノボリノボリテ、七合目ノアタリニイタレバ、道ハ、マスマス、ケハシク、歩行ハ、イヨイヨ、困難トナル。コトニ、空氣、シダイニ、キハクトナレバ、呼吸モ

苦シク、ドーキモハゲシク、ハテハ、五歩行キテハ、休ミ、十歩行キテハ、休ミテ、タダ、金剛杖ニタヨリテ、ノボルニイタル。コノトキ、八合目ノ小屋、目ノ前ニ、見エテ、シカモ、ヨーイニ、達シガタク、モドカシキコト限ナシ。八合目ノ小屋ハ、朝、フモトヲタチタルモノ、タイテイ、宿ル所ナリ。

第十九課　富士登山。(二)

ヤウヤクニシテ、八合目ノ小屋ニ着キテ、宿ル。寒サハゲシケレバ、ゴーリキニセオハセキタレル綿入ヲ着、タキビシテ、寒サヲシノグ。サレド、空氣キハク

飯

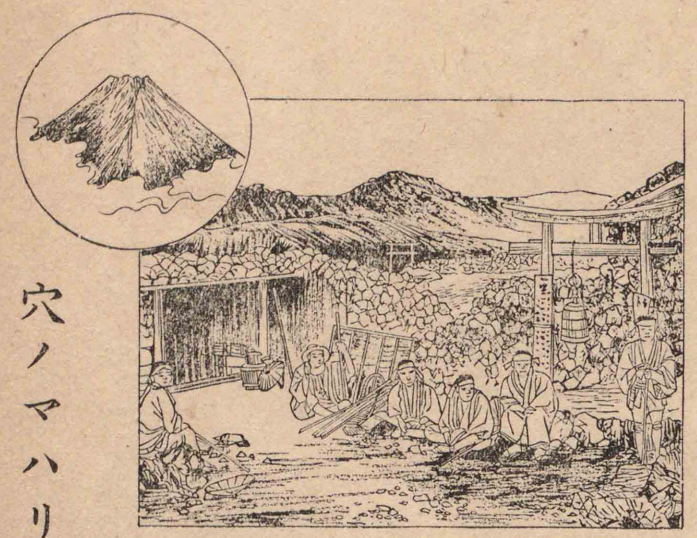
太陽

ナレバ、火モ、ヨクハ、モエズ。ヤガテ、ユフハンノ用意デキテ、ハシヲ取レバ、飯ナマニエニシテ、味ナク、ネドコニ入レバ、呼吸ツマリテ、ヨク、ネムルコトアタハズ。ハゲシキ風砂ヲ吹キ來リテ、戸ヲウツ音モノスゴシ。

東ノ方、ヤヤ、白ムコロ、オキ出ヅレバ、雲ノ色、アルヒハ、紫トナリ、アルヒハ、黄トナリ、紅トナリテ、美シキコトイハンカタナシ。目ノ下ニ、見オロス山、川、海ノ景色、ヤヤ、アキラカニナリテ、眞紅ノ太陽ハ、ヤウヤク、ノボル。ソノ大イサ、ヘイゼイ、見ルモノニ數倍セ

切

リ。太陽ノ光、キラキラト、カガヤクニイタレバ、天地、マッタク、アケワタル。



コノ景色ヲ見ツツ、ノボリ行ケバ、一時間バカリニシテ、チョージョーニ達ス。チョージョーニハ、大イナル穴アリ。昔、噴火シタリシ跡ニシテ、切リタテタルゴトキ岩コレヲカコミ、中ニハ、雪積レリ」。

穴ノマハリニハ、ユゲヲ出ス所アリ。マ

タ、金明水、銀明水トイフ、二ツノ泉アリ。ソノ水ハ雪ノトケタルガシミ出ヅルモノナルベシトイフ。

穴ヲ一周シテ、下山ス。下山スルトキニハ、足、ハナハダ、輕クシテ、登山ノトキノゴトキ苦勞ナシ。一日アマリニシテ、ノボリタル所ヲ、半日ナラズシテ、下ル。タダ、ワラヂヲ、多ク、フミヤブルコトアルノミ。

輕　下

窓

汽車の窓より、あふぎ見る
富士のすがたのけだかさよ。
雲より上にぬけ出でて、
いつも、たかねの雪白し。

船のへさきに、ながめやる
富士のけしきのおもしろや。

さかさに、うつるうなばらの
かげは、忍よりも、たくみにて。

山は、世界に、多けれど、
形のよきはこの山ぞ。

春のかすみのたつあした、
秋の入日のさす夕べ。

第二十課　運動。

あるかねもちのうちに、ひとりの男の子があった。た

御飯

いそー、わがままもので、御飯のときに、うまい、めづらしい食物がないと、いつでも、ぐづぐづ、いって、うちのものを困らせてゐた。それに、運動がきらひで、顔の色もわるく、からだもやせてゐた。父母は、いつも、これをしんぱいして、「どうかして、そのわがままをなほしたいものだ。また、からだをじょーぶにさせたいものだ。」と思ってゐた。

ある日、父はその子を呼んで、「げふは、散歩に、つれて行かう。そして、歸って來たら、御ちそーをしませう。」といった。その子は、これを聞いて、たいそー、喜んだ。

鳴　追

お晝すぎから、父は、その子をつれて、散歩に、出かけて、人家をはなれた野原に、出た。そこは、空氣が清くて、ここころもちのよいうへに、木に、鳥が鳴いてゐたり、所所に、きれいな草花がさいてゐたり、また、とんぼなどがとんでゐたりして、まことに、樂しい所であった。

そこで、父は、その子に草花を折らせたり、とんぼなどを追はせたりして、ながく、遊ばせてゐた。しかし、その子は、ときどき、御ちそーのことを思ひ出して、はなんべんか、父に、「歸らうではありませんか。」といっ

疲

た。

父は、いろいろと、すかして、できるだけ、その子に運動させた。そして、やうやう、日のくれかかるころに、歸って來た。その子は、もう、さっきから、足も疲れ、はらも、たいそー、へってゐたので、歸ると、すぐに、御ちそーをさいそくした。

しばらくすると、母が御膳を出した。こどもは、「どんなうまいものがあるか。」と思って、御膳の上を見ると、いつものよーなものばかりで、べつに、かはった御ちそーはない。

食

そこで、その子は、また、ぐづぐづ、いひだした。母は、「まー。食べてごらん。きっと、いつものよりはおいしいから。」といった。その子は、ぐづぐづ、いひながら、食べてみた。ところが、母のいったとほりに、どれも、たいそー、うまかった。

その子は、ふしぎに思って、「どうしたのでございませう。いつものよーなたべものも、けふは、たいそー、おいしうございます。」といった。父は、「それは、けふは、運動して、はらがへってゐるからです。おまへは、ふだんは、運動をせずに、御飯を食べるから、どんなものを食

べても、うまくないのです。いつも、かういふよーに、うまく、たべようと思ふなら、これから、いつも、よく、運動せねばなりません。」と教へた。

その子は、これを聞いて、これまでのわがままであったことをこーかいした。そして、それからは、學校でも、うちでも、よく、運動するよーになって、顔の色もよくなり、からだもこえてくるよーになった。

をはり。

明治三十六年　十月廿六日　印刷
明治三十六年　十月廿七日　發行
明治三十八年十一月廿五日　翻刻印刷
明治三十八年十二月十五日　翻刻發行

高等小學讀本第一
定價　金七錢五厘

著作兼發行者　文部省
翻刻發行兼印刷者　青木恒三郎　大阪市東區博勞町四丁目貳拾七番屋敷
印刷所　嵩山堂印刷所　大阪市西區新町北通壹丁目六拾五番屋敷

明治三十八年十二月七日
文部省檢査濟

著作權所有

發賣所
發行所　嵩山堂書店　大阪市東區博勞町四丁目貳拾七番屋敷
東京市日本橋區新右衛門町拾六番地
合名會社　國定教科書共同販賣所